

はじめに

本書の担当編集者であるAさんは、企画書を私に送る際に、「仮目次」をご用意くださいました。こんな事柄について書いてほしい、というリストです。その一番目の項目が、「病理医のお仕事とは何か」でした。

なるほど、そうですね。そこがはじめに知りたいことですよ。

これまでも、幾度となく問われ、答えてきました。いくつかのウェブ記事に執筆し、インタビューに答え、何度かは書籍でも取り上げました。何より、これまで仕事やプライベートでお会いしたほとんどすべての方々から、何度も直接尋ねられました。「病理医って何してるの？」と。私にとってなじみ深い質問です。

ですから、私は今回の企画書を読んで真っ先に、

「楽勝だな」

と感じました。

ほかのお題についてもざっと目を通しましたが、基本的には、これまで問われて

きたものばかり。これならばすぐにでも書けそうだ、と思いました。各単元の文字数を埋めるのに、これまでの経験を駆使すればそれぞれ15分もかからないだろうと計算します。すでに頭の中にある結論を再利用することで、手早く1冊の本ができあがるでしょう。

病理医を主人公とした物語。

子供たちが、将来病理医になりたいくなるような手引き書。

人々が医療を身近に感じてくれるようなガイドブック。

だいたいこんなところだな。ササッと執筆を終わらせてしまおう。

そう考えて、さっそくパソコンに向かいました。

ところが。

今、冒頭の「病理医のお仕事とは（仮題）」を書き始めて数行のところまで、私は早くも手を止めて、ぼんやりと天井のあたりを見えています。

ふと、こんな思いに襲われたからです。

私は、「今あるものだけで」この本を書いていいのだろうか？

読み手にとって、単に新しい≡新刊の本だというだけではなく、新しい考え方に
出会える本にしてはどうか。そのほうが、ずっとすばらしいではないか。

そのためには、書き手である私自身が、「新しい考え方」を手に入れながら書か
なければいけない……。

ささやかながらけっこう芯の太い決意が、少しずつ大きくなってきました。さっ
きまで、使い慣れた語彙ごいを用いて本書を仕上げようと思っていたヤラシイ気持ち
が、脳のスキマの部分にしみ込んで消えていきました。代わりに、たぶん私はこの
本をかなり苦勞して書くことになるんだという予感が、じわじわとにじみ出してき
ます。

一般論として、何かを「書くこと」は、読み手に何かを変えてもらいたいという
モチベーションに引っ張られている気がします。読み手が役立てられそうな情報を

一つでも得てくれたらうれしい。これまでの考え方とは違う何かをつかんでもらえたら本望だ。本を通じて、変化してほしい。

この気持ちは、あるいは「教育」とか「指導」と言われているものに近いかもしれない。若い人たちから見ても、より先を生きている「センセイ」が、世にあふれる知識の中から使い勝手のいいものを覚えやすい順番で選んで、きっちりと渡していく作業。このとき教える側が願っているのは、自分の後を追いかけてくる人に「いいほうに変わってほしい」ということだと思います。

私が最近手掛けた、『どこからが病気なの？』（ちくまプリマー新書）という本も、まさにそのような教育的動機から書いた本です。対象としては中学生や高校生向け。ただし、できれば大人が読んでもおもしろいように書こう、老若男女にヤマイの知識を得てもらおう、みんなに変わってもらいたい。そう思って執筆しました。

ところが、執筆中、次第にあることに気づきました。本を通じて変わるのは、読者よりも、書き手である私のほうが先だ、ということなのです。

振り返ってみると、私はこれまでいかなる本の執筆においても、編集者さんたちからいただくお題に答える過程で、これまで考えていなかった文章が指先からカタカタとタイプされていくような感覚を覚えました。たとえば、丸善出版から出した『いち病理医の「リアル」』のときは、私がこれほど「他の医療者たちとコミュニケーションすること」を重要視していたのかと、自ら執筆したはずの文章にびっくりしてしまいました。また、『Dr. ヤンデルの病院選び』（丸善出版）のときは逆に、「簡単に書けるだろうと思っていたお題をうまく処理できない自分」を見つけ、まるで指先がタイプを拒否しているような感覚に戸惑い、深く考え込むことになったのです。

こういった体感が最も顕著だったのは、『病理医ヤンデルのおおまじめなひとりごと』（大和書房）のときです。再読すると当時の気持ちや蘇ってきます。序盤、執筆のモチベーション低下を隠そうともせず、まごまごとしていた私の文章が、編集者が提示したお題を進めるごとに少しずつ変化し、単元を進めるごとに何かをとら

えはじめます。第3章のあたりで、執筆前には言語化した覚えがない「医療シアター」という概念が突然「指先」から生まれて、急速に輪郭を持ち体温を発し、私は驚愕して現実に声まで上げました。

「うわ、『ぼく』はそんなことを考えていたのか！」

私が日ごろからぼやぼやふわふわと考えていることを、縁あって編集者から文章にしてみないかと導かれ、本にまとめさせてもらえることは大きな幸せです。ただし、それは単なる喜びだけでは済まないようです。書くことを通じて、私は素材になりそうな経験や表現を探して脳の中をまさぐったり、いつもと違うスイッチを入れてみたり、ときにはもともとあった自分の一部を整形手術してみたりする。このとき、うれしいとか楽しいという言葉だけでは語れない、かといって辛い苦しいとも少し違う、「脱皮のもぞもぞ感」みたいな不思議な感触を伴います。

平たく言えば、文章を練り込んで1冊にまとめあげることが、執筆者である私自身に刺激として作用する。

書いたものに対して編集者からあいづちやツッコミをもらうこと、本づくりのプロたちからの何気ない反応一つひとつ。これらはそもそも刺激的ですが、どうやらそれだけでもなくて、なんと言うか、書籍執筆という非日常的な環境そのものが、「私の心に作用する圧」を持つているのです。この圧が、読み手よりも先に、まず書き手を変える。

自分の中でだけぬくぬく抱えていたアイディアを、多くの人の目に触れさせると決意した瞬間から発生する、もつとわかりやすくしたい、もつと具体的に著あらかわしたい、もつとおもしろく「連結」していきたいという、もぞもぞした気持ち。これによって、自分の考えが研磨され、刃物のように精錬されていきます。

刃物？ 待てよ、うーん、もう少し違う言葉に書き直すことにします。刃物というと、あたかも思考の細部が削れて無駄が落ちていくような印象ですけれども、ニュアンスはもう少し荒々しくて。

ひとり心の奥底で言語化せずに考えていたナニモノカを、誰かに読んでもらうために文章に変えていくとき、突如として、その思考に外から何かが飛び込んできて

頭の部分に突き刺さることがあります。あるいは、思考の腰の部分を手マターのよ
うなものでガンとやられることもある。すると、思考が研ぎ澄まされるどころか、
思いもよらなかつた形状にデコボコギザギザと変化するんです。いつもいつもまっ
すぐな日本刀に錬成れんせいできるわけではない。けれど、そのほうがいい。

このような思考の衝突や変形は、すべて脳内で起こること、ダイレクトに痛覚
に作用するわけではないですから、安心・安全そのものです。私は執筆の途中から、
刺激・圧・衝突・変形を楽しむようになります。

では、依頼をされて本を書いて、楽しんでるのが私ばかりかというところ、そうい
うわけでもなさそうです。これまで私の書いたものを読んでくださった方の多く
は、「私が執筆前にはさほど考えていなかった部分」に、最も興味を示されています。
「私がうすうす感じてはいたけれど、執筆を通じてはじめて言語化できた部分」
にこそ、読み手は大いに喜んでくださるようなのです。

読者の反応に触れ、執筆の前後で私に変化することを多くの方が「読みどころ」

として期待していると気づいて、はじめは意外でした。それまで書き手は「センスイ」であればいいと思っていましたし、読み手にとってさえ新しければ、書籍の用は十分に足りるだろうと思っていたからです。でも、どうやら、本を愛して下さる読み手の方々は、著者が執筆を通じて変わっていくさまを見て、より大きく反応し、「よし、私も変わろう」と思ってくれます。

これはなぜなんでしょうね？ 書き手と読み手が気分を共有できるから、なのでしょう。ミラーニューロン（相手の行動を見て自分が行動したときと同じように感じる脳の仕組み）のなせるわざ……？

執筆者がおどろき喜びながら変化していくことが、読者の皆様にいい影響を与えるのだとして、その理由は本当のところ、よくわかりません。でも、

「私が『今あるものだけで』この本を書いてはいけない」

という気持ちだけは、確信に近いのです。この本は楽勝で書くべきものじゃない。たった今、書きかけていた冒頭の数ページ分を、まるまる削除しました。「手癖」で答えられるようになりつつあった、「病理医とは何か」「私はどういう人間なのか」

といった質問の数々に、あらためてきちんとぶつかって、圧を感じ、いちから文章を組み立て直すことにします。そうすることで、書き手である私は、もぞもぞどきどきソワソワとしながら変化することでしょう。願わくば、その変化をご覧になった皆さんにも、「これまでの自分」に何かが衝突するような経験をしていただけたらとうれしい。センセイから教わるような教科書の知識とはちょっと違う何かをそこに見出していただければ、と思います。

本書の執筆を開始するにあたり、「決意表明」的な文章を以下にそつと置いておきます。今までの書籍には書いたことのない一文です。

さあ、がんばって書きますので、がんばって読んでください。

2020年10月15日

私／病理医ヤンデル／市原真